

第 3 節 | スタイル・シフト

前節では、ラボヴ的な社会言語学に見られる根本的な問題点、言語変種についての理解に関わり、特に変項規則という概念などに顕著に現れる問題点を素描した。しかし、そのような問題があるにもかかわらず、ラボヴ派が、ここ半世紀に亘り、その詳細で緻密な調査・分析をとおして同定してきた「社会言語学的パターン」は、社会とことばとの関係をめぐる探究、社会言語学的な研究にとって無視することのできない重要な知見の一部を成し続けている。したがって、この社会とことばとの繋がりの一環を成す「社会言語学的パターン」について、本節では、その概略と、社会記号論的な視点から見てそれが持つ含意、それらについて論議していく。

前節での議論からも明らかなように、ラボヴ派の研究の根幹を成す洞察は、もちろん、実際に観察される経験的なレヴェル、言い換えれば、語用論のレヴェルでは、言語には多様性、変異が遍在しているというものである。アフリカ系アメリカ人俗語英語などの言語変種の調査・研究では、このような変異は、もちろん、これらの変種が（なんらかの様態で）存在する、そして構造的な変異形がこれらの変種に観察される、といった基本的で自明な事実に加えて、これらの変種それぞれの内部にも変異が存在する、たとえばスタイル・シフトと呼ばれる現象が広範に観察されるという、より興味深い事実によっても示されているものである。そして、そのようなスタイル・シフトは、社会的・社会言語学的に意味を持つと思われるような一定のパターンをさまざまな調査にわたり示してきたのであり、この事実のうちに、言語的な変異・多様性、ひいては社会と言語との繋がりについての重要な知見が現れているといわねばならない。

つまり、いわゆる黒人英語、アフリカ系アメリカ人俗語英語の話者も、常に必ず、この変種を「純粋」なかたちでしゃべるわけではなく、状況／コンテクストにより、この変種以外の変種、たとえば標準変種の要素、標準変種に属す

る変異形を取り入れたしゃべり方をすることが——すなわち、コンテキストによりスタイル・シフトを行うことが——ラボヴ派の研究によって明確に示された¹¹⁸。一般的にいて、インフォーマルなコンテキストからフォーマルなコンテキストへと状況が変わるに従い、アフリカ系アメリカ人俗語英語、その他、非標準変種の話者たちは、非標準変種から標準変種へとスタイル・シフトする。だが、より重要なことは、この非標準変種から標準変種へとスタイル・シフトする仕方が、階級やジェンダー、職業などにより、一定の相違を示す、ということである。そして、ここに、適切な分析、つまり記号論的分析を加えた場合、ラボヴ派の社会言語学の研究が、近代社会文化の様態に関して、ある重要な知見をもたらしていることが明らかとなる¹¹⁹。

本節および次章以降では、これらの点について論述し、標準語というレジスターを、規範意識を強く附与されたエンブレムとして据える近代社会文化の有り様やその特異さを描いていく (Silverstein, 1996a [1986-87])。そのための準備作業として、以下では、社会的な範疇と結びついた3種の言語的範疇、すなわち、ラボヴなどのいう①「(社会言語学的) ステレオタイプ」、②「マーカー」(標識)、③「インディケーター」(指標)、について簡単な説明を行う必要がある (Labov, 1972a; Coates, 2004 [1986]; Romaine, 2003)。なぜならば、上述のスタイル・シフトは主に、この3種のうちの1つである「マーカー」によって——以下に見るようなさまざまな重要な含意を伴って——示されているからである。

社会言語学的ステレオタイプ

まずは、社会言語学的ステレオタイプについて簡単に概説しておこう。これは、社会的な範疇と言語的範疇との相関 (地域方言・社会方言的相関) のうち、言語使用者たちの意識に上るもの、特に、統計的・蓋然的 (probabilistic) な

118 もちろん、上でも確認したように、アフリカ系アメリカ人俗語英語へと取り入れられた標準変種の変異形が、アフリカ系アメリカ人俗語英語の中で、(標準変種とは異なった) 独自のレジスターの構成要素となるケースも見られることに留意したい。

119 ラボヴ派に見られる「フォーマリティ」や「スタイル」の理解の限定性については Irvine (1979) などを参照。

かたちではなく、範疇的 (categorical) なかたち、「これこれこの種の人びとは、これこれこのように話す」(たとえば、「白人は“ng”と言い、黒人は“n”と言う」) といったかたちで言語使用者たちの意識に上るものを主に指す。日本の方言学などに顕著に見られる、方言に関する意識調査はいうに及ばず(『月刊言語』、1995)、アンケート／調査票を用いた方言に関する調査なども、被調査者=方言話者の意識的な言語・方言把握を分析対象とするからには、(以下に説明するマーカーやインディケーターではなく)主にステレオタイプの調査であるといえる¹²⁰ (Shibamoto, 1987a)。

その他、ステレオタイプが顕著に現れるジャンルとしては、意識的に使われる、あるいは、意識的に作られたことばがあり、たとえば、国語辞典や方言辞典などの辞書や規範的な文法書、規範的なマナー書(正しいスピーチの仕方、敬語の正しい使い方)などが、それにあたる。したがって、これらによって規範的にコード化された標準語・方言・敬語などは、特に語彙の側面において強くステレオタイプ化される傾向を示す。

さらに加えて、ラジオやテレビのドラマなども、それらが脚本家や作家などによって意識的に書かれたもの、方言指導者などによって意識的に指導されたものであるかぎり、顕著なステレオタイプ化を蒙ったものとなっている。その一例として、(京塚昌子などを擁した)東芝日曜劇場、(泉ピン子などを擁した)「橋田壽賀子劇場」的なドラマ、あるいは、その起源であるラジオ・ドラマ、帝国劇場的な演劇、新派、1890年代後半の硯友社のお涙頂戴もの、尾崎紅葉(1867~1903年)の『金色夜叉』(1897~1902年)や(薩摩出身の大山元帥(1842~1916年)などをモデルとした)徳富蘆花(1868~1927年)の『不如

120 このような調査では、特に語彙に焦点が置かれていることに注意したい。小山(2011: 第1章)でも詳述したように、言語の他の要素に比べ、語彙は、言語使用者たちの意識に特に上りやすいため、この種の調査の焦点に置かれることになる。また、接触言語の形成(特に、①レクシファイヤー／語彙提供言語と、文法の枠組みを提供する基底(substrate)言語との区分・分割、②混合言語(mixed languages)に見られる同種の分割、など)に対して、この事実——文法的特徴ではなく、語彙が、言語使用者たちの意識に特に上りやすく、よって意識的な借用の対象となりやすいという事実——が持つ重要性については小山(2022a)で詳述している。